

列王記第二 22 - 23 章 「ヨシヤの宗教改革」

1 A 律法の書 22

- 1 B 神殿修復 1 - 7
- 2 B 読後の衝撃 8 - 13
- 3 B 預言者による指示 14 - 20

2 A 律法の実行 23

- 1 B 朗読と誓い 1 - 3
- 2 B 偶像の除去 4 - 20
 - 1 C 神殿とエルサレム 4 - 14
 - 2 C 北イスラエル 15 - 20
- 3 B 過越のいけにえ 21 - 27
- 4 B 早死と息子の死 28 - 37

本文

列王記第二 22 章を開いてください。私たちは間もなく、列王記を読み終わります。来週の学びで、南ユダがバビロンによって滅ぼされることとなりますが、その直前に主はヨシヤという、これまでになく忠実な王を立ててくれました。

1 A 律法の書 22

1 B 神殿修復 1 - 7

22:1 ヨシヤは八歳で王となり、エルサレムで三十一年間、王であった。彼の母の名はエディダといい、ボツカテの出のアダヤの娘であった。22:2 彼は主の目にかなうことを行なって、先祖ダビデのすべての道に歩み、右にも左にもそれなかった。

私たちは前回、ヒゼキヤの生涯を学びました。彼の子マナセの生涯も学びました。ユダの中で、いや北イスラエルを合わせても、いやかつてのカナン人と比べても悪い王であったことを知りました。ユダの国に偶像をはびこらせただけでなく、神殿の中にも偶像を持ちこみました。そしてこれらを拝まない者を殺すという迫害も行いました。彼の子アモンは、二年という治世で短命でした。なぜなら彼の家来が暗殺したからです。けれども、民衆はその家来たちを憎み、彼らを殺してアモンの子ヨシヤを王に立てました。そのために、ヨシヤは八歳という幼さで王に就いています。そしてヨシヤは、曾祖父ヒゼキヤと同じく、主の目にかなうことを行なって、先祖ダビデにならって、右にも左にもそれませんでした。

22:3 ヨシヤ王の第十八年に、王はメシュラムの子アツアルヤの子である書記シャファンを主の宮に遣わして言った。22:4 「大祭司ヒルキヤのもとに上って行き、主の宮に納められた金、すなわち、入口を守る者たちが民から集めたものを彼に計算させ、22:5 それを主の宮で工事している監督者たちの手に渡しなさい。それを主の宮で工事している者たちに渡し、宮の破損の修理をさせなさい。22:6 木工、建築師、石工に渡し、また宮の修理のための木材や切り石を買わせなさい。22:7 ただし、彼らの手に渡した金を彼らといっしょに勘定してはならない。彼らは忠実に働いているからである。」

神殿の修繕について、私たちは似たような記録を以前読みました。イゼベルの娘アタルヤが不法に女王になったけれども、そしてダビデ王朝の息子たちを彼女が惨殺したけれども、一人残されたヨアシュがいました。彼が七歳で王となり、神殿の修繕を命じました。ヨシヤも、昔のヨアシュに倣ってこのことを行なったのかもしれませんが。ちょうど幼いときから王であったことも似ていますし、主の目にかなうことを行なおうと思った時にこのことを行なったのでしょう。

2 B 読後の衝撃 8 - 1 3

22:8 そのとき、大祭司ヒルキヤは書記シャファンに、「私は主の宮で律法の書を見つけました。」と言って、その書物をシャファンに渡したので、彼はそれを読んだ。22:9 書記シャファンは王のもとに行って、王に報告して言った。「しもべたちは、宮にあった金を箱からあけて、これを主の宮で工事している監督者たちの手に渡しました。」22:10 ついで、書記シャファンは王に告げて、言った。「祭司ヒルキヤが私に一つの書物を渡してくれました。」そして、シャファンは王の前でそれを読み上げた。

律法の書が見つかりました。“見つかった”ということは、もちろん律法の書が読まれていなかったわけです。神殿の修繕はしているけれども、律法が読まれないことは、午前中に話しましたように、教会には忠実であっても、聖書の言葉を読んでいないという状態に当てはめることができるでしょう。マナセ、そしてアモンの時代に、律法の巻き物が焼かれていたと考えてもおかしくありません。

この書が律法のどの部分であったか議論があります。「一つの書物」とありますが、モーセの書いた五書のうち、申命記だったのではないかという意見があります。なぜなら、これからヨシヤが行う宗教改革は申命記に記されていることがほとんどだからです。申命記 17 章 18-20 節に、イスラエル人が王を立てる時、律法の書を読まなければいけないことを神は命じています。「彼がその王国の王座に着くようになったなら、レビ人の祭司たちの前のものから、自分のために、このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることがないため、また命令から、右にも左にもそれることがなく、彼とその子孫とがイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるためである。」そして申命記 31 章 9-13 節には、七年ごとに全会衆がエルサレムにおいて律法の朗読を聞かなければならないと定められています。

これらのことを行なったという記録が、実にイスラエルの歴史の中でごくわずかなのです。ヨシュアが約束の地に入ってシケムで律法の朗読を行なった（8章）こと、そしてヨシャパテが、つかさたちをユダの町々に遣わして、律法を教えさせたという記録が歴代誌第二 17 章 7 節にあります。したがって、記録されていなくても行っていた可能性はありますが、行っていたのは非常に稀だったのでしょう。

書記シャファンは、大祭司に渡されたと言って一つの書物を持ってきました。彼もこの時点で事の重大さに気づいていませんでした。神殿の修繕プロジェクトに神経が使われていましたが、「一巻の書があります」と何気なく持ってきています。これは、私たちキリスト者が示してしまうような多くの姿勢ではないでしょうか？生活の他のいろいろなことに、また教会の行事には神経を使いますが、いざ聖書を開くとなると、そこまでの大きな注意と期待で開いているかどうか、ということです。

初代教会が行っていたことは、その時間の多くが聖書の朗読と教えと勧めに費やされていました。「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。（1テモテ 4:13）」申命記で神が命じられたことは、新約時代の神の教会にも原則として適用されているのです。

22:11 王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の衣を裂いた。22:12 王は祭司ヒルキヤ、シャファンの子アヒカム、ミカヤの子アクボル、書記シャファン、王の家来アサヤに命じて言った。22:13 「行って、この見つかった書物のことばについて、私のため、民のため、ユダ全体のために、主のみこころを求めなさい。私たちの先祖が、この書物のことばに聞き従わず、すべて私たちについてしるされているとおりに行なわなかったため、私たちに向かって燃え上がった主の憤りは激しいから。」

ヨシュアが読んだところは、おそらく申命記の後半部分であると思われます。その一部を読んでみます。29 章 18-21 です。「万が一にも、あなたがたのうちに、きょう、その心が私たちの神、主を離れて、これらの異邦の民の神々に行き、仕えるような、男や女、氏族や部族があってはならない。あなたがたのうちに、毒草や、苦よもぎを生ずる根があってはならない。こののろいの誓いのことばを聞いたとき、「潤ったものも渴いたものもひとしく滅びるのであれば、私は自分のかたくなな心のままに歩いても、私には平和がある。」と心の中で自分を祝福する者があるなら、主はその者を決して赦そうとはされない。むしろ、主の怒りとねたみが、その者に対して燃え上がり、この書にしるされたすべてののろいの誓いとその者の上のしかかり、主は、その者の名を天の下から消し去ってしまう。主は、このみおしえの書にしるされている契約のすべてののろいの誓いにしたい、その者をイスラエルの全部族からより分けて、わざわいを下される。」マナセの時から異邦の神々を拝んでいて、それによって神は必ず呪いの誓いを果たされる、と宣言しておられます。

ヨシャが、律法に書かれてあることに衝撃を覚えたのは、聖霊の働きであると言えます。聖霊という言葉は出てきませんが、イエス様は弟子たちに、「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。（ヨハネ 16:8）」と言われました。誤り、特に罪についての自覚を与えてくださいます。また、

真理の御霊はイエス様が命じられたことを思い出させる、とも言われました。御霊が力強く働かれると、そこには主が語られた命令が私たちの心に突き刺さります。そして、とてつもない罪の自覚が与えられ、どうしようもない呻き悶えとなります。「そこからどうしたら救われるのか？」という苦しみに変わります。そこで、必死になって神に泣き叫ぶのです。

キリスト教会では、「リバイバル」という言葉が使われて久しくなりました。これの元々の意味をあまり知られずに使われています。聖書では、「生かす」と訳されています。ある人は、「聖霊の刷新」と言いました。また多くの人が、数多くの方が教会に来るようになるとリバイバルが起こったと表現しますが、それは間違った見方です。確かに数多くの方が教会に集うようになるかもしれませんが。そうではなく、聖霊が力強く働かれることによって、神への恐れ、罪の自覚が新鮮なものとなり、主の十字架の前で罪を告白し、捨てていくことがリバイバルであります。霊的復興、あるいは覚醒とも呼ばれます。

アメリカには、その全体の社会をさえ変えてしまった、と言われる霊的大覚醒が二度起こりました。第一大覚醒は 1700 年代に起こり、ジョナサン・エドワーズという人がいました。「怒れる神の御手の中にある罪人」という歴史に残る説教をしました。新生体験をしていない者は、必ず神の怒りの手に落ちている。そこから這いつくばって出てくることはできない、という内容です。ところで、彼の説教は大声で叫ぶものではありません、淡々と慎重に言葉を選んで語ったと言われています。けれども、この説教を聞いた後に、罪意識から会衆は泣き叫び、気絶し、激しい痙攣を起こしたと言われています。

第二次大覚醒は 1800 年初頭に起こり、これによって個人の生活が変わり、なんと、女性参政権や奴隷制度撤廃という社会変革にまで影響を及ぼしました。この時に神に用いられた伝道者チャールズ・フィニーは、リバイバルをこう定義しています。「リバイバルは、罪の自覚と悔い改めが新たにされることであり、神に従順になることを強烈に願望するようになる。深いへりくだりをもって、神の意志に自分の意志を放棄することである。」

3 B 預言者による指示 14 - 20

22:14a そこで、祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シャファン、アサヤは、女預言者フルダのもとに行った。彼女は、ハルハスの子ティクワの子、装束係シャルムの妻で、エルサレムの第二区に住んでいた。

ヨシヤは、神の呪いの誓いが必然であることをはっきりと知りました。あまりにもはっきりとしているので、自分がこれから何をすればよいか分からない程でした。そこで、御心を認めるために祭司と書記を預言者のところに遣わしました。興味深いのは女預言者のところに彼らが言ったことです。この時には、おそらくエレミヤもいたことでしょう。けれどもまだ、若かったかもしれません。そしてゼパニヤ書のゼパニヤも、ヨシヤの治世から預言を行ないました。ヒゼキヤの治世はイザヤ書がその注解になると話しましたが、ヨシヤからバビロン捕囚までの注解を知りたいければ、エレミヤ書をお勧めします。

理由は分かりませんが、女預言者フルダのところに行っています。新約においても、赤ん坊のイエスを見て預言をしたエルサレムにいる預言者はアンナという女性でした。主は預言において、女性にも賜物を与えて、預言を語らせてくださいます。

22:14b 彼らが彼女に伝えると、22:15 彼女は彼らに答えた。「イスラエルの神、主は、こう仰せられます。『あなたがたをわたしのもとに遣わした人に告げよ。22:16 主はこう仰せられる。見よ。わたしは、この場所とその住民の上にわざわいをもたらす。ユダの王が読み上げた書物のすべてのことばを成就する。22:17 彼らはわたしを捨て、ほかの神々に香をたき、彼らのすべての手のわざで、わたしの怒りを引き起こすようにした。わたしの憤りはこの場所に燃え上がり、消えることがない。』

ヨシヤが悟った通りでした。主がモーセの律法によって語られたことは、確かにその通りになります。けれども、主はその怒りの日を引き伸ばしてくださいます。

22:18 主のみこころを求めするために、あなたがたを遣わしたユダの王には、こう言わなければなりません。『あなたが聞いたことばについて、イスラエルの神、主は、こう仰せられます。22:19 あなたが、この場所とその住民について、これは恐怖となり、のろいとなると、わたしが言ったのを聞いたとき、あなたは心を痛め、主の前にへりくだり、自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。・・主の御告げです・・22:20 それゆえ、見よ、わたしは、あなたを先祖たちのもとに集めよう。あなたは安らかに自分の墓に集められる。それで、あなたは自分の目で、わたしがこの場所にもたらすすべてのわざわいを見ることがない。』彼らはそれを王に報告した。

ヨシヤが貢献したのは、この引き伸ばしです。つまり、自分の生きている間はこの災いを見ることはない、という引き伸ばしであります。実際、ヨシヤが死ぬのは紀元前 609 年であり、605 年にユダに第一次バビロン捕囚が起こります。この悲惨を見ずに済んだのです。以前、あの極悪王アハブも、裁きを宣言された後にへりくだったら、彼の時代ではなく彼の息子の時代にアハブ家の全滅が来ると、引き伸ばされました（1列王 21:29）。ここには原則があります。かつてアブラハムに神が約束された、「正しい者を悪者と共に滅ぼすことはない」という原則です。ヨシヤのゆえに、神は裁きの手を引き留められました。ヨシヤの悔い改めとへりくだり、そのものがユダの民にとって執り成しとなったのです。

同じことをイエス様は、いちじくの木 of 喩えの中で語られました。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。もしそれで来年、実を結ばばよし、それでもダメなら、切り倒してください。』」（ルカ 13:6-9）」もう遅すぎるのです、実を結ばないのは明らかです。けれども、

またチャンスをくださいと番人が執り成しています。それであと一年、切り倒されずにいるのです。その間に悔い改めるのかどうか？が問われています。

2 A 律法の実行 23

1 B 朗読と誓い 1 - 3

23:1 すると、王は使者を遣わして、ユダとエルサレムの長老をひとり残らず彼のところに集めた。23:2 王は主の宮へ上って行った。ユダのすべての人、エルサレムの住民のすべて、祭司と預言者、および、下の者も上の者も、すべての民が彼とともに行った。そこで彼は、主の宮で発見された契約の書のことばをみな、彼らに読み聞かせた。23:3 それから、王は柱のわきに立ち、主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物に示されているこの契約のことばを実行することを誓った。民もみな、この契約に加わった。

ヨシヤは、自分の生きている間は災いがないことは分かっています。けれども、かろうじて主が憐れんでくださって今のユダがあります。彼は、自分の生きている間に主が忌み嫌われている偶像を取り除きたいと強く願いました。それで長老たちを集め、エルサレムの住民とユダの人々を主の宮に集めました。そして、律法を彼らに朗読して聞かせます。これは午前礼拝で話した通りです。聖書を朗読し、それを説明し、はっきりと理解するようにさせるのが祭司と教師の役目であり、はっきりと理解する義務が聞いている者たちにあります。そして、ただ聞くだけでなく、誓いを行なっています。つまり、書かれてあることに応答するのです。実践し、実行するのです。

ヨシヤは、まず自分自身が主の前に契約を結びました。自分が誓いました。そこに民が加わっています。彼自身が契約を神と結んでいることを見て、民がそれについて行っています。これが、霊的指導者の模範です。霊的指導者は人々に強要しません。自らが率先して行います。そして人々が付いて来られるようにします。使徒ペテロは、「あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となきなさい。（1ペテロ 5:3）」と言いました。

2 B 偶像の除去 4 - 20

これからヨシヤによる、偶像の一掃作業を読みます。

1 C 神殿とエルサレム 4 - 14

23:4 それから、王は大祭司ヒルキヤと次席祭司たち、および、入口を守る者たちに命じて、バルヤアシアエラや天の万象のために作られた器物をことごとく主の本堂から運び出させ、エルサレムの郊外、キデロンの野でそれを焼き、その灰をベテルへ持って行った。23:5 彼はまた、ユダの王たちが任命して、ユダの町々やエルサレム周辺の高き所で香をたかせた、偶像に仕える祭司たちを、また、バルヤア太陽や月や星座や天の万象に香をたく者どもを取り除いた。23:6 彼は、アシアエラ像を主の宮から、エルサレムの郊外、キデロン川に運び出し、それをキデロン川で焼いた。彼はそれを粉々に砕いて灰にし、その灰を共同墓地にまき散らした。

ヨシヤはまず、神殿内の偶像から取り除きました。バアルやアシェラ崇拝に使われていた器具を聖所から運び出させました。そして、像だけでなく祭司たちも追い出しています。そして、アシェラ像そのものを取り出しました。キデロン川はエルサレムと東のオリーブ山の間にある谷にあります。そして、偶像礼拝を二度と行わせないために、死体に触れるように灰を共同墓地に蒔いています。律法の中に死体に触れるものは汚れる、という定めがありますが、まことの神ではないですが、異教徒であっても同じ考えを持っていました。

23:7 さらに、彼は主の宮の中にあつた神殿男娼の家をこわした。そこでは、女たちがアシェラ像のための蔽いを織っていたからである。

恐ろしいことですが、アシェラ像と共にこのような忌まわしい行為が行われていました。神殿の中で男と男が、異教の儀式の中で忌まわしいことを行なっていたのです。

23:8 彼はユダの町々から祭司たちを全部連れて来て、ゲバからベエル・シェバに至るまでの、祭司たちが香をたいていた高き所を汚し、門にあつた高き所をこわした。それは町のつかさヨシュアの門の入口にあり、町の門にはいる人の左側にあつた。23:9 高き所の祭司たちは、エルサレムの主の祭壇に上ることはできなかったが、その同輩たちの間で種を入れないパンを食べた。

ゲバは、ユダの北端の町です。そしてベエル・シェバは南端の町です。ユダ全体の高き所、ということです。ヒゼキヤの時代、高き所は打ち壊されましたが、マナセがまた復活されました。高き所は、町のつかさの門の入り口にまで浸透していて、ごく普通になっていました。そして高き所の祭司たちはレビ人でした。申命記の中に、レビ人は他の町々に住んでいても、エルサレムで他のレビ人と共に奉仕をすることができるようになっています（申命 18:6-8）。けれども祭壇での奉仕にあずかることはできません、これはアロンの直系だけが行います。

23:10 彼は、ベン・ヒノムの谷にあるトフェテを汚し、だれも自分の息子や娘に火の中をくぐらせて、モレクにささげることのないようにした。

マナセが導入させた、忌まわしいモアブ崇拝です。ヒノムの谷はエルサレムに南と西に走っています。そこをヨセフは汚しました。死んだ者の骨など、何かばら撒いたのでしょう。この時以来、エルサレムのヒノムの谷は、町の汚物、動物の死体などの焼却所となり、いつまでも火が立ち上ることとなりました。それをギリシヤ語で「ゲヘナ」と呼び、イエス様が永遠の地獄をゲヘナと呼ばれました。

23:11 ついで、ユダの王たちが太陽に献納した馬を、前庭にある宦官ネタン・メレクの部屋のそばの主の宮の入口から取り除き、太陽の車を火で焼いた。23:12 王は、ユダの王たちがアハズの屋上の部屋の上に造つた祭壇と、マナセが主の宮の二つの庭に造つた祭壇を取りこわし、そこから走って行って、そして、その灰をキデロン川に投げ捨てた。

かつてのユダの王が犯した、個人的な偶像礼拝の場をヨシヤは清めていきます。主のゆえに、主の宮を清め、そして民のためのユダの町々を清めましたが、今度は身内の汚れを取り除いています。いつも、自分の家にある罪を取り除くのはとても難しいです。他の人たちのものを除くのは客観的になれるので簡単ですが、自分の仲間ものは身が裂かれる思いです。けれどもヨシヤは断行しました。太陽に献納した馬の像、そしてその車、さらにアハズ王とマナセ王の造った祭壇を取り除きました。

23:13 王は、イスラエルの王ソロモンがシドン人の、忌むべき、アシュタロテ、モアブの、忌むべきケモシュ、アモン人の、忌みきらうべきミルコムのためにエルサレムの東、破壊の山の南に築いた高き所を汚した。23:14 また、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を切り倒し、その場所を人の骨で満たした。

ついにヨシヤは、これらの偶像礼拝の始まりになったところを汚しました。そうです、ソロモンが晩年に外国の女たちが持ち込んだ神々のために宮を建てたのです。それはエルサレムの東にオリブ山がありますが、南に隣接する山があります。ソロモンが偶像の高き所を築いたことから「破壊の山」と呼ばれるようになりました。

2 C 北イスラエル 15 – 20

23:15 なお彼は、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの造った高き所、すなわち、その祭壇も高き所もこわした。高き所を焼き、粉々に砕いて灰にし、アシェラ像を焼いた。

これは、すごいことです。ヨシヤはユダの地から離れて、さらに元、北イスラエルの地にまで入って偶像の除去を行いました。そこはアッシリアの領土であったはずでは？と思うかもしれませんが、もうこの時期はアッシリアの力が弱まっていた。間もなくバビロンがアッシリアよりも力を増します。そこで北イスラエルの地におけるアッシリアの支配が弱まっていたので、ヨシヤは北イスラエルにも入ることができました。

ユダでは、偶像礼拝を導入させたソロモンの高き所を汚しましたが、北イスラエルでは、同じく偶像礼拝を導入したヤロブアム一世の祭壇を壊し、また汚したのです。この時に、彼も知らぬうちに、驚くべき預言の成就がありました。

23:16 ヨシヤが向き直ると、山の中に墓があるのが見えた。そこで彼は人をやってその墓から骨を取り出し、それを祭壇の上で焼き、祭壇を汚れたものとした。かつて、神の人がこのことを預言して呼ばわった主のことばのとおりであった。23:17 彼は言った。「あそこに見える石碑は何か。」すると、町の人々は彼に答えた。「ユダから出て来て、あなたがベテルの祭壇に対してされた、あのことを預言した神の人の墓です。」23:18 王は言った。「そのままにしておきなさい。だれも彼の骨を移してはならない。」それで人々は彼の骨を、サマリヤから出て来たあの預言者の骨といっしょにそのままにしておいた。

この出来事は、紀元前 931 年にヤロブアムがベテルに祭壇を築いた以降のことです。したがって、三百年以

上経って、あの神の人が預言したことが実現しました。彼はこう言いました。「祭壇よ。祭壇よ。主はこう仰せられる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしておまえの上にささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』（1列王 13:2) 」名前まで挙げて、預言しています。これらのことが、その町の人々には知られていて、それで確かにヨシヤ王がこのことを行なったのだ、という畏怖の念に打たれたに違いありません。そしてヨシヤは、神の人と、彼をだました老預言者の墓は、その神の人を敬うために掘り返さずにそのままにしました。

主が語られたこと、そしてご自分の御心と正義は必ず行われます。それがたとえ遅いように見えても、神は必ず行われるのです。

23:19 なお、ヨシヤはイスラエルの王たちが造って主の怒りを引き起こした、サマリヤの町々の高き所の宮をすべて取り除き、彼がベテルでしたと全く同じように、それらに対してもした。23:20 それから、彼は、そこにいた高き所の祭司たちをみな、祭壇の上でほふり、その祭壇の上で人間の骨を焼いた。こうして、彼はエルサレムに帰った。

なんとヨシヤは、その忌まわしい高き所の祭司たちを、その祭壇の上で殺し、ほふった、とありますが、火で焼いて燃やしました。これで北イスラエルの首都の周りにたくさんあった宮も取り除きました。

3 B 過越のいけにえ 21 – 27

ヨシヤの宗教改革は、除去することだけで終わりません。いや、こちらのほうがもっと大切でしょう、イスラエルの民が初めに行いなさいと神から命じられていたこと、ずっと行っていなかったことを行なったのです。それは実に、過越の祭りでした。私たちは、行ってはいけないもの、禁じられているものをやめる、取り除くことは行っても、やらなければいけないことについておろそかにしがちです。ヤコブは、「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。(4:17) 」と言いました。

23:21 王は民全体に命じて言った。「この契約の書にしるされているとおりに、あなたがたの神、主に、過越のいけにえをささげなさい。」23:22 事実、さばきつかさたちがイスラエルをさばいた時代からこのかた、イスラエルの王たちとユダの王たちのどの時代にも、このような過越のいけにえがささげられたことはなかった。23:23 ただ、ヨシヤ王の第十八年に、イスラエルでこの過越のいけにえが主にささげられただけであった。

さばきつかさ、つまり士師たちがいた時から、ということですから、実に七百年ぐらいつと過越の祭りをしていなかったこととなります。実は歴代誌を見ますと、ヒゼキヤ王も行いましたが、北イスラエルの全体も抱え込んで、律法に書かれているとおりに行ったのは初めてなのでしょう。

考えてもみてください、数百年行っていなかったことを、ただ律法に書かれているから、というだけで行うというこ

とは、今の言葉を使えば「原理主義」です。大昔のものを引っ張り出して今の適用しているのです。けれども、主はそれを喜ばれました。主はしなさいと語られたことを、そのまま行うこと、それは時を経ても、時代が変わっても行うことであることを思い出させます。

23:24 さらにヨシヤは、霊媒、口寄せ、テラフィム、偶像、それに、ユダの地とエルサレムに見られるすべての忌むべき物も除き去った。これは、祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしるされている律法のことばを実行するためであった。

霊媒や口寄せは、オカルトであり、主が禁じられています。そしてヨシヤは、ユダの民の個人的生活にも入り込んでいます。テラフィムは家の中におく偶像で、置物です。こうしたものも取り除いたということは、家の中を探して見つけた、ということになります。今、こんなことを行なったら住居侵入罪で捕まります。けれども、私たちが最も偶像を持ちやすいのは、自分の家の中です。その私的な空間で、主をあがめているのかどうか問われています。

23:25 ヨシヤのように心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてモーセのすべての律法に従って、主に立ち返った王は、彼の先にはいなかった。彼の後にも彼のような者は、ひとりも起こらなかった。23:26 それにもかかわらず、マナセが主の怒りを引き起こしたあのいらだたい行ないのために、主はユダに向けて燃やされた激しい怒りを静めようとはされなかった。23:27 主は仰せられた。「わたしがイスラエルを移したと同じように、ユダもまた、わたしの前から移す。わたしが選んだこの町エルサレムも、わたしの名を置く、と言ったこの宮も、わたしは退ける。」

ここが、今日の学んでいる 22-23 章でテーマになるところです。ヨシヤほど徹底的な宗教改革を行なった王はいませんでした。ここまで心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてモーセのすべての律法に従って、主に立ち返った王はいませんでした。それにも関わらず、主はマナセが行ったことのゆえにユダをその地から引き抜くことをお決めになっておられたのです。

ここから私たちは何を知ることができるでしょうか？まず、先にヨシヤの治世の注解がエレミヤ書であると言いましたが、まずエレミヤ書から見ましょう。3 章 10 節にこうあります。「このようなことをしながら、裏切る女、妹のユダは、心を尽くしてわたしに帰らず、ただ偽っていたにすぎなかった。…主の御告げ。… (3:10) 」ヨシヤは心を尽くして主に立ち返りましたが、神との契約の中に加わったユダの民は、心を尽くしていませんでした。これらのことをヨシヤが行っていた時にそれに賛同しましたが、心の中は偽っていたのです。マナセの時にもたらされた偶像礼拝に慣れ親しみ、外側は、偶像は取られても、内側には偶像はたくさんありました。ですから、ヨシヤがいなくなった後に、ユダの民は再び公然と偶像礼拝に戻って、バビロンに捕え移されるまでその深みに入っていくのです。

エレミヤ書には、「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行うことができるだろう。（13:23）」とあります。クシュ人は黒人ですから、その色を変えることはできません。豹の斑点も同じです。同じように、ユダヤ人は罪に慣れ親しみ、もう二度とそれを変えることができない程になりました。それで主は、エレミヤを預言者に召される時に、彼らを神に立ち返らせることを求めませんでした。ユダがバビロンに服し、その地から引き抜かれ、そして後に再び植られるように意図されたのです。「見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。（エレミヤ 1:10）」彼らを植えるために、まず引き抜かなければいけませんでした。

人には、もう戻ることのできないある一点があります。ユダヤ人がイエス様を信じないことについて、こう使徒ヨハネは言いました。「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行なわれたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現わされましたか。」と言った預言者イザヤのことが成就するためであった。彼らが信じることができなかったのは、イザヤがまた次のように言ったからである。「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見、心で理解し、回心し、そしてわたしが彼らをいやす、ということがないためである。」（ヨハネ 12:37-40）」初めは、「信じなかった」と言いましたが、次に「信じることができなかった」と言っています。初めは、意志をもって拒んでいます。けれども、御言葉を聞き、それを拒むと、ついに心が聞いて信じることができないほどかなくなってしまう。これは恐ろしいことです。マナセが行ったことによって、ユダの民はある意味、この地点を通過してしまったのです。

けれども、エレミヤ書にはもう一つの約束がありました。それは新しい契約です。「見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。…主の御告げ。…彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。…主の御告げ。…わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。（31:31-33）」自分の心がかたくなってしまったので、どんなに外側でおきてを守ろうとしても、ことごとく破ってしまいます。それで主はユダ、またイスラエルの家に対して、神ご自身の律法を心の中に置く新しい契約を立てると約束してくださいました。心の中に律法を置くとは、心が一新されて、律法を内なる神の声として聞き従うことができるようになる、ということです。エゼキエルはこれを、「御霊が注がれて、石の心から肉の心に変えられる」と表現しました。

私たちは、時にユダの民のように取り除かれなければいけないかもしれません。自分のしていること、自分の持っているものが取り除かれるかもしれません。それは、もう古くなってしまったのでそれを取り除いて、初めから新たにするためです。そしてその古い心は、御霊によって一新されなければいけません。この決断は、真実に

主に心から自分を明け渡していかない限り起こらないことです。

4 B 早死と息子の死 28 - 37

そしてヨシヤが早死にしてしまう、残念な出来事を次に読みます。

23:28 ヨシヤのその他の業績、彼の行なったすべての事、それはユダの王たちの年代記の書にしるされているではないか。23:29 彼の時代に、エジプトの王パロ・ネコが、アッシリアの王のもとに行こうとユーフラテス川のほうに上って来た。そこで、ヨシヤ王は彼を迎え撃ちに行ったが、パロ・ネコは彼を見つけてメギドで殺した。23:30 ヨシヤの家来たちは、彼の死体を戦車にのせ、メギドからエルサレムに運んで来て、彼の墓に葬った。この国の民は、ヨシヤの子エホアハズを選んで、彼に油をそそぎ、彼の父に代えて、彼を王とした。

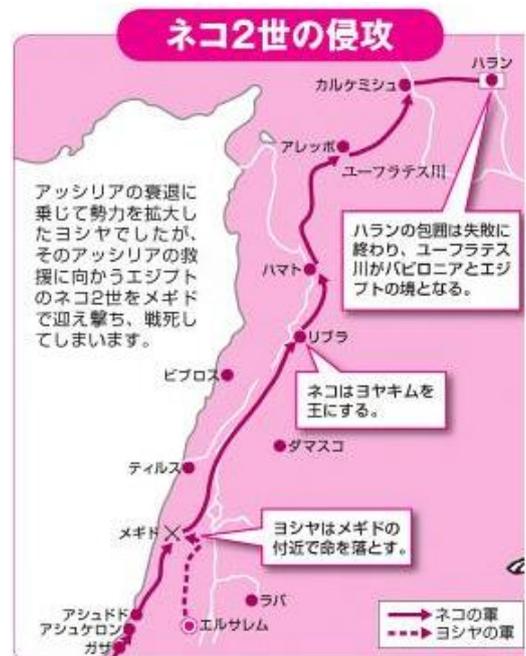
ここで、再びユダを取り巻いている国際環境を知る必要がります。ヒゼキヤの時代のアッシリアの拡張は、もうすでに終わったことを知ってください。ヒゼキヤの時にアッシリアの東で奮闘していた、バビロンのことを思い出してください。次第にバビロンが優勢になってきました。そしてついに、バビロンはアッシリアの首都ニネベを紀元前 612 年に陥落させます。その時のことを預言したのがナホムです。そして残党が西のハラン（カラン）に逃げました。そしてバビロンは、その残党とカルケミシュで戦うことになります。

けれども、エジプトがそれを嫌いました。もしバビロンが勝てば、バビロンの力が一気に強くなります。それを避けたかったので、アッシリアの残党を支援して、カルケミシュではエジプトとバビロンの衝突になったのです。そこでエジプトは敗れます。605 年の事です。

その時にネブカデネザルがユダに来て、王族の一部を捕え移す第一次バビロン捕囚を実行します。したがって、アッシリアの姿はなくなり、エジプトの支配がユダを覆うも、それは束の間でバビロンに服さなければいけないという歴史をこれからユダは辿ります。

そして今、読んだところはカルケミシュでの戦いのために北上する、パロのネコの軍隊です。歴代誌第二において、ネコはヨシヤを打つ意図はないと言っています。「ユダの王よ。私とあなたと何の関係があるのですか。きょうは、あなたを攻めに来たものではありません。私の戦う家へ行くところなのです。神は、早く行けと命じておられます。私とともにおられる神に逆らわずに、控えていなさい。さもなければ、神があなたを滅ぼされます。

（35:21）」ところがヨシヤは変装して、戦いに挑みます。けれども、エジプトの兵士の矢に当たってメギドで死んでしまいます。まるで、アハブがアラムと戦った時に似ていますね。たとえ異教徒であっても、主はネコの口を使って語っておられたのです。ヨシヤが 39 歳という若さで死んでしまうことによって、バビロンによるエルサレム滅



亡も早まりました。

その戦いの場所はメギドです。北と南の文明の衝突地点がイスラエルであり、イスラエルでの軍事衝突地点はメギドです。歴史を通じてここで戦いが繰り返されて、近代では英国がオスマン・トルコとここで戦って勝利を得ました。そして黙示録 16 章では、世界大戦の軍隊の終結場所になることが預言されています。「メギドの丘」=ハルマゲドンのことです。

23:31 エホアハズは二十三歳で王となり、エルサレムで三か月間、王であった。彼の母の名はハムタルといい、リブナの出のエレミヤの娘であった。23:32 彼は、その先祖たちがしたように、主の目の前に悪を行なった。23:33 パロ・ネコは、彼をエルサレムで王であったときに、ハマテの地リブラに幽閉し、この国に銀百タラントと金一タラントの科料を課した。23:34 ついで、パロ・ネコは、ヨシヤの子エルヤキムをその父ヨシヤに代えて王とし、その名をエホヤキムと改めさせ、エホアハズを捕えて、エジプトへ連れて行った。エホアハズはそこで死んだ。

30 節を見ますと、エホアハズは民が選んでいます。これをエジプトのネコは嫌いました。彼は自分の傀儡を作るために、エホアハズを取り除きました。リブラに幽閉して、ユダに多額の科料を課して、それからヨシヤの他の息子エホヤキムを立てます。エホアハズ自身はエジプトで死にます。これでユダはエジプトに従属することになりました。

23:35 エホヤキムは銀と金をパロに贈ったが、パロの要求するだけの銀を与えるためには、この国に税を課さなければならなかった。彼は、パロ・ネコに贈るために、ひとりひとりに割り当てて、銀と金をこの国の人々から取り立てた。23:36 エホヤキムは二十五歳で王となり、エルサレムで十一年間、王であった。彼の母の名はゼブダといい、ルマの出のペダヤの娘であった。23:37 彼は、その先祖たちがしたとおり、主の目の前に悪を行なった。

エホヤキムは、本当に悪い王でした。彼はこのように重税を課している間、自分のために宮殿を造っていました。父のヨシヤと比べてエレミヤはエホヤキムを責めました（22 章 13-16 節）。そしてヨシヤと対照的な出来事は、エレミヤ書 36 章に書いてあります。主がエレミヤに、自分が預言したことをバルクに記録させなさい、文書にしなさいと命じられました。それでバルクが書き記したものを、かつてヨシヤの書記シャファンの息子や孫がバルクが読むのを聞きました。ところがこの巻き物を、なんとエホヤキムは一枚ずつ暖炉の火にくべてしまったのです。「エフディが三、四段を読むごとに、王は書記の小刀でそれを裂いては、暖炉の火に投げ入れ、ついに、暖炉の火で巻き物全部を焼き尽くした。王も、彼のすべての家来たちも、これらのすべてのことばを聞きながら、恐れようとせず、衣を裂こうとしなかった。（23-24 節）」自分の衣と心を裂くのではなく、なんとその巻き物を裂いてしまったのです。こうも対照的な父と子でありました。